

映像教材「今に伝わる、よみがえる—— 鶴岡八幡宮の女房装束」

「歴史教室」事前学習としての活用と成果

飯島 利一

Toshikazu IJIMA

一 はじめに

本校では、平成三〇年の開校七〇周年記念事業の一つとして、日本文化史資料館（以下、資料館）の映像教材を制作した。本校の資料館は「学校博物館」という枠を越え、学会や研究機関からも注目される貴重な品々を数多く収蔵しているが、その価値を生徒の学習にいかせていない状況があった。そこで本校の財産をもっと有効に活用し、教育活動に資するための試みとして、「今に伝わる、よみがえる 鶴岡八幡宮の女房装束」と題した映像による教材化を企画した。ストーリー仕立ての展開と分かりやすいビジュアル効果を実現するには、予想以上に多くの苦勞があったが、この映像教材を利用すれば、普段は体験できないような授業を何度でも再現すること

が可能である。生徒たちが身近にある文化財の価値に気づき、親しみを抱いてもらうモデル教材となるだろう。本校の建学精神に根ざした、特色ある「日本文化理解教育」プログラムの嚆矢としたい。この映像教材は、平成二八年度から、「歴史教室」（一年生の希望者を対象にした二泊三日の研修行事）に参加する生徒たちの事前学習に活用している。これまでに行われた授業の実践と成果を報告しよう。

二 文化財の「保存」と「復元」とは？

資料館には、原始・古代からおよそ近世まで貴重な文化財が多く収蔵されているが、その中から題材に選んだのは、鶴岡八幡宮に伝来した「女房装束」の復元模造品であった。映像教材の制作にあたっては、まず、資料館の収蔵品から何を学ばせるべ



鶴岡八幡宮御神宝（復元模造品）

きかを話し合い、最初に取り上げるテーマとして、文化財の保存と復元の重要性に焦点をあてることにした。この女房装束が経てきた歴史をたずねれば、制作された当時の時代背景のみならず、長年にわたり、この品を守り続けてきた人々の思いが伝わってくると思えたからである。

とくに「復元模造品」といえば、単なるコピー品やニセモノにすぎないといったイメージが先行するだろう。実際、鶴岡八幡宮のフールドワークに参加した生徒の一人は「とてもきれいだっただけ感動しましたが、複製と知って少しがっかりしてしまいました。明日、本物が見られるのか!? とても楽しみです」とのコメントを残している。まさに、このマイナスイメージを払拭するのが、本教材のねらいである。

実は、負の先入観は生徒だけの話ではない。私自身、学生時代に博物館を訪れた際に「復元品」との記載があれば、一瞥して通り過ぎることもあった。だが大学で歴史学を学ぶうちに、文化財の復元模造品をつくるということ自体が学問なのだを知った。たとえば、古代の銅鐸などを、現在の鋳物師と研究者が共同で再現を試みながら、使用された材質や技法を解明し、果てはそこから古代の人々や物資の交流まで明らかにしていく。これは「実験考古学」として一分野を確立しているのだ。つまり、現在失われてしまった技法を調査・研究し、忠実なかたちでよみがえらせることは、先人のこころを知り、また次世代に継承していく重要な役割がある。

さて、この装束のもとになった原品は、現在、東京国立博物館に

保管されており、現存最古の女房装束として国宝に指定されている。鎌倉時代につくられ七〇年以上の時を経た装束は劣化を免れず、昭和三〇年代末に、修復と復元のプロジェクトが実現した。

その際、本校の副校長だった鈴木敬三先生（一九一三―一九九二）がこの研究に参加していたことで、貴重な復元品の一つが資料館に収蔵されることになったのである。復元にあたったのは、いわゆる「人間国宝」で西陣織の第一人者である喜多川平朗氏（一八九八―一九八八）。喜多川氏は、装束の実物を丹念に調査するばかりではなく、神社仏閣を自ら訪ね歩くという徹底した職人魂の持ち主であったという。その努力が実り、鎌倉時代の驚くべき技術の高さを世に知らしめ、失われていた中世の織物技法を現代に復興させた。

具体的に映像教材の展開内容を説明しよう。

- (1) まず、生徒たちが鶴岡八幡宮でフールドワークをおこない、装束の由緒・歴史背景について学び、「この装束がなぜ、どのように現代に伝えられたのか」について考える。
- (2) つぎに東京国立博物館を訪ねて、「現在、装束はどのような状態で保存されているのか？」さらに「復元模造品をつくる意味は何なのか？」を考え、保存と復元の両輪が重要であったことを知る。

- (3) 学校に帰った生徒たちは、あらためて資料館で女房装束を目のあたりにし、さらにサブライズ企画として、代表の生徒一

人が装束を実際に着装する。一連の体験学習を通じて、考えたこと、感じたことをまとめる。

三 授業展開のながれ

授業は、映像教材を視聴させながら、映像に登場する生徒たちの学習活動を追体験する形で進めた。映像は四つのチャプターに分かれており、それぞれのチャプターでテーマが出題されている。

映像資料そのものは二十三分間だが、生徒のグループワークなどの作業の時間をとり、あわせて約六〇分間でおこなった。担当教員が映像中の出題場面で一時停止しながら、学習課題に取り組ませる。生徒たちはグループで話し合い、それぞれの考えを発表したうえで、全体で共有した答えをワークシートにまとめる。

1 導入

まず、映像教材を視聴させる前段階として、生徒にはこの授業のテーマに対する興味や関心を引き出したい。そこで、教科書等に掲載されている国宝指定の文化財を事例にあげ、次の〈テーマ問題〉に取り組ませた。(ア)～(エ)の事例については写真・図版などを用意した。名称を知らなくてもテレビや本の写真で見たことがあるという生徒が多かった。

テーマ問題

次の資料はいずれも「国宝」です。これらの資料に共通すること
で、下の〇〇に入る語句を考えてみましょう。

(ア) 法隆寺五重塔

(イ) 鶴岡八幡宮蔵 女房装束

(ウ) 徳川美術館蔵 源氏物語絵巻

(エ) 犬山城天守

(ア)～(エ)は、いずれも「〇〇最古」のものである。



調べ学習にとりくむ生徒たち

グループ(四人程度)ごとに話し合い、それぞれワークシートに記入させてから、生徒数人を指名して答えさせた。〇〇に入る語句として、ほとんどの生徒は「現存(最古)」と回答し、その意味も

理解していたようだ。なかには、「世界（最古）」「日本（最古）」の回答も少なくなかった。

◆教師の説明「〇〇に入る語句は、〈現存〉が正解です。(ア) 〈(エ) 〉いずれも現存する最古の歴史遺産なのです。〈現存最古〉とは、現在まで失われることなく残った文化財のなかで、最も古い、ということですね。法隆寺五重塔が現存する世界最古の木造建築であることはよく知られています。それでは、これらの貴重な文化遺産が、長い歳月のなかで消失することなく、今に伝わったのはなぜでしょうか。残念ながら、長い年月のなかでは、戦乱によって破壊されたり、火災で焼失してしまうことが多かったようです。それにもかかわらず、今日まで失われることなく伝来したのは、なにか特別な理由が隠されているのかもしれませんが。今日はこの点について、みんなで考えていきましょう」。

◆生徒の理解を深めるために、次の点を補足した。

(一) 国宝とは、「世界文化の見地から価値の高いもので、たぐい
ない国民の宝たるもの」(文化財保護法二七条)で、文化財保護
法によって指定された重要文化財のうち、とくに国(文部科学大
臣)が指定したもの。文化庁によれば、「文化財は、我が国の長
い歴史の中で生まれ、はぐくまれ、今日まで守り伝えられてきた
貴重な国民的財産」で、文化財保護法に基づいて重要なものを国
宝、重要文化財、史跡等として登録している。

(二) 文化財の焼失の事例として有名なものに、昭和二四年の法
隆寺金堂の火災により壁画が焼傷した例がある。これが文化財を

保護する法律をつくるきっかけになった。文化財保護法は、文化財の保存と活用、さらに国民の文化的な生活の向上を目的として制定された。

2 映像教材による授業展開

◆教師の説明「今回の授業は、本校で制作した映像資料を使って、
(イ) 鶴岡八幡宮の女房装束について考えていきます。女房装束とは俗にいう〈十二単〉のことですから、『源氏物語』や「かくや姫」など平安宮廷の華やかなイメージを持つでしょう。しかし、平安時代の装束は残っていないのです。女房装束として現存最古のものは、鶴岡八幡宮に伝えられてきたもので、鎌倉時代の作になります。さて、この女房装束は、いったいどのようなようにして今日に伝わったのか、資料を見てみましょう」(映像を視聴させる)。

映像教材チャプター① 内容

- ① 鶴岡八幡宮 現存最古の女房装束
なぜ失われることなく、今に伝わったのか?
- ② 生徒が鶴岡八幡宮へ調査(フィールドワーク)に行く
↓ 神職の方から「八幡宮ですと大切に保存されてきた」と聞く
↓ 八幡宮ゆかりの特別な女性のために作られた装束に違いない
↓ いったい誰のためにつくられたのか?

.....

◆教師の説明「たしかに特別な人物の装束だったのなら、貴重なものとして大切にされてきたのかもしれませんが。それでは、グループごとに問題1に挑戦してみましょう。下の（*推理する手がかり）をヒントに、歴史辞典や人名事典などをフル活用して、大胆に、発想豊かに話し合って推測してみましょう」。

問題1

鶴岡八幡宮の女房装束は、誰のためにつくったのか？（歴史辞典・人名事典など使用可。）

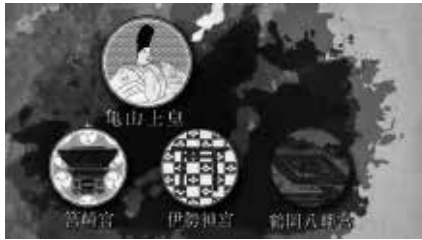
*推理する手がかり

- ①女房装束とは公家女子の服装のひとつ。平安時代以降、朝廷に仕えるなど高位の官女が着用。俗に「十二単」といわれている。
- ②鶴岡八幡宮は、神奈川県鎌倉市にある神社。鎌倉幕府の初代将軍源頼朝ゆかりの神社で、源氏および鎌倉武士の守り神として、武士の尊崇を集めた。
- ③社伝では、この装束は後白河上皇あるいは龜山上皇がつくらせたといわれている。奉納されたからは、ずっと鶴岡八幡宮に保存されてきた。

この授業は「歴史教室」の参加希望者が対象であるため、もともと歴史に興味をもっている生徒が多い。そのため、自分の知識を互

いに出し合い、活発な議論になった。グループごとに思いついた人物の名前を発表させ、なぜそのように考えたか？ その理由やエピソードなどの話をさせた。生徒の回答には、鶴岡八幡宮と深い関係がある源頼朝に注目して、その妻北条政子の装束なのではないかという説が最も多く、ほかには静御前、大姫（頼朝の娘）などの女性の名が挙がった。また、朝廷に関係する女性説。社伝に注目して、後白河・龜山両上皇の「侍女」、「愛した女性」、清少納言や紫式部など古典の授業でお馴染みの名前も登場した。ごく少数だが、天照大神など女性の神さまに奉納したのではないかと鋭い意見もあった。

◆教師の説明「いろんな説が出てきましたね。愛する女性のためにつくったという説はロマンをかきたてます。それでは、映像で正解を確認してみましょう」（映像を視聴させる）。



鶴岡八幡宮の権禰宜さまの解説

映像教材チャプター② 内容

① 鶴岡八幡宮の女房装束の由緒

蒙古襲来の脅威に対して、社寺が行った「戦勝」や「安寧」の祈り

↓ 鶴岡八幡宮のご祭神である神功皇后への捧げ物だった

以来、御神宝の装束として大切に保管され現在に至る

② 現在、女房装束はどのような状態になっているのか？

.....

◆ 教師の説明「正解は意外なものでしたね（ほとんどの生徒は実在

の人物が着用するものと予想していたので、意外だったはずである）。鶴岡八幡宮のご祭神である神功皇后という神さまのためにつくられたものでした。神さまの衣料として捧げられた御神宝だからこそ、今日までずっと大切に保存されてきたことが分かります。時代を経ても連続と続いてきた神への信仰心が貴重な装束を守り継いできたといえるでしょう」。

◆ 次の点を説明して、生徒の理解を深めた。

(1) 神功皇后とは、『古事記』『日本書紀』によれば、仲哀天皇の皇后で応神天皇の母。「三韓征伐」を指揮し、海戦を勝利に導いた逸話で知られている。全国の八幡宮（八幡神社）には、応神天皇・比売神・神功皇后を合わせて八幡三神として祀られている。

(2) 御神宝とは、一般に、社の祭神に由緒の深い宝物や調度品、装束類のこと。伊勢神宮では、式年遷宮にあわせて御神宝も新調されることが有名。

◆ 教師の説明「それでは、次の問題に取り組んでみましょう。この女房装束は、現在、どのような姿で保存されているのでしょうか」。

鎌倉時代につくられた装束が、七〇〇年以上たった現在、一体どのような状態になっているのか。当然のことながら、傷んだ状態になっていると推測されるが、実際はどうか。御神宝への人々の思いや、先人が大切にしてきた文化や技術を受け継ぐことの意味に気づかせたい。

問題2

七〇〇年以上も受け継がれてきた女房装束。現在、どのような状態になっているのでしょうか、予想してみましょう。

グループごとに話し合った結果を発表させると、大きく分けて二つの方向性があった。①装束がかなりダメージを受けているという意見（黄ばみ・色落ちしている、糸がほつれやすくなっている、虫食いで穴があいている、生地が触れたらポロポロの状態になっている、縮んでいる）。②工夫しながら上手く保存している（できるだけ空気に触れないようにしている、乾燥を防ぐ、最低限の修復をしている）という意見であった。

また一方で、問題1との関係で、神さまへの捧げ物なので一切修理するのは許されず、自然のままにしているのではないかと一言もあつた。他には神秘的な力が働いていて、意外とキレイなまま

なのではないか、といった声や、祭祀の折に誰かが舞を踊るなど着用しており、かえって生地傷みが少ない、などのユニークな見方があった。

◆教師の説明「たしかに長い歴史を経ていますから、大分傷んでいるだろうと推測できますね。修理されているという意見や、できる限りそのままの状態でも保存されているなど、いろんな答えがありました。実際のところ、文化財はどのような考え方で保存されるのか、資料で確認してみましよう」（映像を視聴させる）。



東京国立博物館での池田先生の解説

映像教材チャプター③ 内容

- ① 女房装束の現在の状態 生徒の考えた推測
- ② 生徒が原品を保管している東京国立博物館へ調査（フィールドワーク）に行く

↓ 上席研究員池田宏氏の「文化財の保存・復元」についての解説

(1) 装束劣化のため合成樹脂加工による修理

(2) 復元模造という方法

◆教師の説明「装束の繊維が粉になってしまうような劣化を防止するために、せめて形を残そうと合成樹脂によって修理されていたことが明らかになりました。文化財はそのままではなく、やはり、きちんと修理・修復が施されているのですね。一方で、貴重な歴史遺産を保存するためには復元模造（レプリカ）をつくるという方法があるようです」。

問題3

文化財の復元模造を制作することに、どんな意味があるのでしょうか。

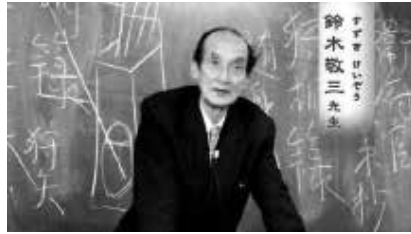
グループごとの話し合いにおいて、劣化がすすんでボロボロになり、形がなくなってしまうのは、実物がもともとどのようなものであったのか分からなくなってしまう。そのため、将来のために同じものを残す必要があるという意見が共有された。これを受けて次の二点の考え方が出された。

(1) 本物（文化財）を大切にするあまり、その物の本来の機能や目的が果たせない時に復元模造品が代用できる。複数の模造品

をつくれれば、消失してしまつた場合の保険となる。また多くの人に展示して見せることができる。

(2) 復元模造品を制作当時と同じ方法でつくることで、原品(文化財)を作つていた当時の技術や、その時の人々の生活や思いが理解できるのではないか。復元することによって作り方など新たな歴史的発見や研究につながるかもしれない。

◆教師の説明「いろいろな角度から考えることができますね。それでは、文化財を扱う立場からはどのように考えられているのでしょうか」(映像を視聴させる)。



鈴木敬三先生



喜多川平朗氏

映像教材チャプター④ 内容

①喜多川平朗氏による復元模造の制作

失われた技術の再生 浮織・縫取織の技術

.....

重要無形文化財保持者(いわゆる人間国宝)

↓古典的技術の解明や継承をめざす

②日本文化史資料館専門委員 鈴木眞弓氏による女房装束の着装

↓復元模造の女房装束を実際に着てみる

③専門家の先生のメッセージ 生徒たちの感想

.....

◆教師の説明「手触りや質感、色合いに至るまで忠実に再現する。

喜多川さんのエピソードから、復元模造を作るのは非常に大変なことだと分かりますね。復元模造は、単に形だけを模したのではなく、①材料や技術も制作当時のものを使って、忠実に再現することをめざすものであり、②それが古典技術の解明と継承の役割を担っている、という重要な意味があるのです。喜多川さんが復元に挑戦したことで、この女房装束には想像を絶するほどの高度な技術が使われていたと判明したのです。それはこの上ない高貴な存在、神さまへの切実な祈りが込められていたからでしょう」。

◆生徒の理解を深めるために、次の点を補足説明した。

(1) 喜多川平朗氏は、この装束の復元模造に成功した西陣の職人。有職織物を丹念に調査・研究し、浮織・縫取織など失われていた中世の織物技術を復興させた。この功績によって「有職織物」の分野で重要無形文化財保持者に指定された。

(2) 無形文化財とは、演劇・音楽、工芸技術など無形の文化的



資料館での鈴木真弓先生の解説



女房装束の着装

「わざ」そのものである。文化財保護法に基づき重要無形文化財保持者が認定される。いわゆる「人間国宝」は通称であって、正式な言い方ではない。

3 女房装束の着装とまとめ

◆教師の説明「ところでみなさん。本校の教員だった鈴木敬三先生が文化財の研究に携わっていたことで、本校にある女房装束がこんなに貴重なものだったと知って、驚きませんでしたか？ こればかりでなく、資料館にはとても貴重な収蔵品が他にも数多くあるのです。映像のなかの女子生徒が、復元装束を着ていたのは印象的でしたね。自分も着てみたいと思いませんか。これからその装束を見に資料館へ行ってみましょう」。

授業当日、資料館委員会の専門委員の田中潤先生に依頼して、女房装束の着装をお願いしていた。田中先生は、映像のなかの生徒と同様の手順で、装束の解説を加えながら着装してくださった。生徒にとってはサプライズ企画となり、実際に袖を通した生徒の多くは感動の声をあげた。最後に教室にもどり、生徒に今日の授業の感想を書かせた。

◆教師の説明「最後に、今日、学習したことをまとめましょう。感じたこと・考えたことをワークシートに書いてください」。

問題4

鶴岡八幡宮の女房装束の資料映像を鑑賞して、歴史的な文化遺産の伝来と保存、そして復元模造について、みなさんが学んだことは何でしょうか。

映像に出ていた生徒の発言や、ご出演頂いた先生方のメッセージ、また喜多川平朗氏の資料から「先人たちの想い、生きてきた証を後世に」「今も昔も未来も変わらずにあるということ」「ものを通じて日本文化を学ぶ」「体験を通じて歴史の重みをあらためて見直す」などに注目させて、この教材から汲み取って欲しいテーマ、すなわち文化遺産の保存・復元模造の意義を確認した。次の二点をまとめて授業を終えた。

(1) まず、この装束をつくった人、守り継いできた人々の想いが

あり、それが脈々と継承されてきたからこそ、歴史的な文化遺産として現代に伝わっている。

(2) そして、その意識が復元模造による再生を実現し、今によみがえらせることができたからこそ、歴史的な文化遺産を次の世代に伝えていくことができる。

四 生徒の感想

授業終了時間を過ぎて、生徒は黙々と書き続けていた。内容は①歴史遺産の保存・復元に関するもの ②神への捧げもの・信仰心に関するもの ③実際の着装体験に感動したものと大別することができる。素晴らしい感想を書いてくれたので、少々長くなるがそのまま紹介したい。

○昔の文化をいかにして守り継いでいくか、大切なことを改めて考えることができて勉強になった。さらに歴史が好きになりました。昔のものをそのまま保存することは、もちろん大事だけれど、それを後世に残すためには、時に手を加え時に模造品を作るといったことも必要なのだとわかりました。本日、復元された女房装束を着させていただいて、直に触れることで当時の人は、神様についてこんな風に考えていたのかなとか、昔の技術ってすごいなとか、たくさんさんのことを感じられてとても興味深かったし、貴重な体験をさせていただきました。國學院高校にあるあの装束がこれからもずっと

残っていけばいいなと思います。(一年十二組 F.O.さん)

○女房装束という一つのものに焦点を当ててじっくり見ていくことによって、女房装束の作られた意外な背景を見ることができたり、またここまで伝わってくるために、多くの人間が関わってきたことを知った。復元品は所詮コピーだと軽く見ていたところがあつたけれど、実はたくさんの研究と工夫と努力の賜物であり、私たちが歴史を理解していくのに非常に大きな役割を果たしているのだなとわかった。初めて着た女房装束は、どこまでも丁寧に美しく織られた布地で、纏うと身が引き締まるような感じがした。あんなに高度な技術が七〇〇年前に存在していたことにも驚きだけれど、いちど失われたそれを再現した現代の技術者たちにも感服した。(一年十組 M.Y.さん)

○先人たちの技術が、今に伝わっているのは素晴らしいことだと思います。今までは修復や復元等に対してあまり良いものだと思いませんでしたが、後世に伝えていく技術を解明するにあたってとても大切なことだと思いました。女房装束を着てみて、とても貴重な体験ができました。見た感じ重そうでしたが、思ったより軽く、生地も触り心地が普通のものとは違いました。模様もすごく凝っていて繊細でした。とても貴重な体験ができてよかったです。普段の授業のように暗記などではなくそこから一歩踏み込んで、体験し調べていくのはとても大切なことだと思いました。出雲がより楽しみに

なりました。(二年十一組 N.M.さん)

○復元することの大切さがとてもよくわかった。多くの人に広めるということもそうだけれども、昔にあった技術の再現や継承ということも大切であるということがよくわかった。女房装束と今の機械で作ったものと比べて手触りや文様の感じが全く異なり、神様のためにとても良いものを作ったのだなと感じた。そうしたものの技術を今再現するだけでなく後世にも伝えるということが一番大切であるということがよくわかった。(二年四組 Y.T.くん)

○女房装束という名前だったので、天皇の近くの女の人に捧げたものだと思っていたら、神様へのものだ知りびっくりしました。最初の説明を聞く中で、ずっしりとしていてかなり固めの生地だと思っていました。実際に来てみてそこまで重くもなく、ざらざら感はありませんが、少し硬い位の生地で、不思議な感じでした。鳳凰の模様のところとかよく見てみるとやっぱり手織りという感じがして、肌ざわりも違った。昔の人は、この装束の下に七、八枚ほど衣を重ねていったと知ってすごいいました。神様に捧げるものであって、人間が着るものではないので内側が普通の服のように整ってなく、外から見るだけではわからない内側も近くで見られたり、貴重な体験ができて本当に良かったです。(二年十二組 H.S.さん)

○DVD、グループワーク、女房装束を実際に着てみて、昔の人たちが当時から今の世まで残したものの凄さを知ることができた。今まで残されてきたものというのは、多分、歴史上何らかの重要性があったため、大切に保管されてきたのだと思う。長い歴史が紡がれてきた女房装束も復元するまでに大変なことがいくつもあったと思う。高校でそんな女房装束を着てみることでできたのは、一生に一度あるかないかくらいの貴重な体験になった。十二単は一枚一枚が重く、それを重ねるためとても重くなるんだと思っていたが、実際に着てみるとそれほど重量はなく着心地もかなり良かった。このことからまだ知識があるだけで実際のことを知らないものはたくさんあるのではと感じたので歴史の衣装や作法を体験できる機会があればやってみたいと思った。(二年一組 A.S.さん)

○普段考えもしないもの、あまり気にも留めていなかったものを題材にした授業だったので、問題に対する自分の意見が、いかに浅やかだったのかよくわかった。「技術の解明、継承」という文化を守っていく側の視点としての意義を知ることができ、とても新鮮で歴史的なものに興味があった。実際に女房装束を着てみて、洋服や浴衣とは違う重みや光沢なども感じ、昔の人の広大な技術を実感した。DVDを見たときに刺繍かなと思っていたものが、本当に織る時に一緒に織られたのだとわかり感動した。(一年八組 M.T.さん)

○日本にとって、蒙古襲来という大きな危機が訪れたときに神様に助けてもらおうと、自分たちの感覚で最上級のものを捧げたという話がとても心に残りました。とても文化的で美しいと思います。女房装束の復元模造は、機械で織ったものに比べ厚みがあり、しっかりとした作りなのにもかかわらず、軽くて着心地がとても良かったです。細かい模様、裏地まで丁寧にできていて、本当に感動しました。過去の技術、失われかけた技術や文化を蘇らせ、後世へとつないでいくことの難しさ、大切さもひしひしと伝わってきました。当時の感覚、流行などが、着物の研究によって少しずつ解明されるということもすごいと思います。田中先生の話から模様も種類だけでなく、大きさ、着物の重さ、色をとる染料に至るまで、階級によって変わったということがわかり、日本人の心の細やかさを感じました。(二年六組 Y. S.さん)

○今日まで残っているもので、神様に納めるためのものはとても貴重は何百年も保管されていることから、改めて日本の神様に対する信仰心、そしていかに神様を大切にしてきたかが、身をもって感じる事ができてよかったですと思います。そして貴重なそれらの技術を残していくために、現代の人々が敬意を持って保存、修理し、後世にも残していくためにその技術をよみがえらせることも含めてすごいと感じました。一つ一つの歴史的な資料には、当時と現代の多くの人々が関わっているのだなと思うと感慨深いものだと思います。(二年八組 H. S.さん)

○とにかく興奮したのは、女房装束の復元品を実際に着てみて触ってみたことでした。まず着てみて思ったよりも軽く、しかしながらとても緻密に織り込まれていて硬くザラザラしていました。中の衣は三重から四重になっていて折り返していたところと切りっぱなしのところがありました。また描かれていた模様の鳳凰が一番柔らかく、ふわっとした触り心地で規則正しく並んでいた。ほとんど実際に服を着た感想になってしまいました。初回のワークショップで触れることができたのだと思っています。一回のワークショップでこれほどの感激ができるとは思っていませんでした。(一年十二組 D. S.くん)

○女房装束を実際に着てみてとても重みを感じた。裏地までしっかりと、触ってみるととてもざらざらした。鶴岡八幡宮の女房装束は神様のために作られたということに納得した。これを復元することによって、古典的な技術が分かり、継承していくという意味があったことに感動した。さて私たちにできる事はなんだろうか。それは多くの人に広め将来に伝えていくことではないかと私は考える。そうすることで日本の文化の劣化を防ぐのではないだろうか。とても良い経験ができた。(二年二組 M. Y.さん)

〈参考文献〉

- 國學院高等学校「学校博物館の資料映像の制作と教材化の研究」『東京私学教育研究所紀要』第六四集（二〇一六）
- 鈴木敬三（編著）『古典参考図録』國學院高等学校・改訂新版（一九九九）
- 鈴木敬三（編著）『有職故実大辞典』吉川弘文館（一九九六）
- 千家和比古「学校博物館の実相と諸問題—國學院高等学校を例として」『博物館雑誌』8・1・2（一九八三）
- 文化庁企画・工芸技術記録映画「有職織物—喜多川平朗のわざ」（一九七三）
- 日本経済新聞文化部（編）『日本人の手』展望社（一九六三）
- 『美を伝える—京都国立博物館文化財保存修理所の現場から』京都新聞出版センター（二〇一）
- 中村哲編著『学校を活性化する伝統文化の教育』学事出版（二〇〇九）
- 栗原澄子「鶴岡八幡宮の御神宝の装束について」『被服史からみた御神宝装束の基礎的研究』ブレーン出版（二〇〇一）

※この授業実践は、資料館委員会の小川澄人教諭・笠原卓巳教諭・鈴木聡史教諭の尽力によるところが大きい。また授業当日には、専門委員の田中潤先生にご協力をいただき、女房装束の着装の企画を実現できた。心より感謝申し上げます。